

「子どもらしさ」の過去・現在・未来

特集号『子どもらしさ』へのアプローチの総括にあたって

小 針 誠

1. はじめに

本稿の目的は、本学会の紀要『子ども社会研究』22号（2016年刊）から25号（2019年刊）の全4号における特集号『子どもらしさ』へのアプローチの締めくくりにあたって、全体のまとめ（総括）を行うことにある。簡潔に内容を紹介すると、特集号論文として掲載された各論文のレビューを通して、日常語と化している「子どもらしさ」なるものがどこから来て（過去）、私たちはそれをどのように語り論じているのか（現在）を考察し、今後の課題（未来）について問題提起することにある。

本誌は、本特集号がスタートした22号より一新された。

出版元がそれまでのハーベスト社より、学会事務を委託することになった内外出版に変更された。それに伴って、本誌の判型は従来のB5版からA5版へ、そして表紙デザインの装いも新たになった。

また、それと同時に、加藤理氏が七代目の本誌紀要編集委員長に就任した。氏は歴代の紀要編集委員長のうち、初の日本教育社会学会の非会員である。

本学会は、多様な専門領域からなる子どもの「学際研究」の場をめざして発足した。ところが、発足当時から今日に至るまで、日本教育社会学会の会員が学会運営などでリードしてきた事績は多くの本学会会員の認めるところだろう。それは、本学会の歴代会長と、加藤以前の紀要編集委員長の全員がその在任中に日本教育社会学会の会員であったことから窺い知ることができる。

日本教育社会学会と一定の距離を置いてきた加藤が紀要編集委員長を務めた

2期4年の学会年度の間に、紀要編集委員会は全4号にわたって特集号のテーマとして『『子どもらしさ』へのアプローチ』を設定した⁽¹⁾。「子どもらしさ」という、一見すると、通俗的なキーワードで特集号のテーマを組もうとするアイデアは、教育社会学研究者にはなかなか着想できない卓見であろう。また、これまで本誌の特集号は10、15、20周年記念号、17号以降は隔年単発のテーマで組まれてきたのに対し⁽²⁾、今回は「子どもらしさ」を特集号のテーマとして4年間全4号を通して継続したことも大きな特徴である。

その特集号の意図や目的について、加藤は本誌22号の特集号の巻頭言「特集『子どもらしさ』へのアプローチ」において以下のように述べている。

「子どもらしさ」とは何かという問いに、今号では教育社会学、心理学、教育人類学、保育学、児童文化学の立場からアプローチを試みる。それぞれの研究領域で理解できる「子どもらしさ」についての論考を読み比べることで、他国を旅する時にも似た発見が得られることを期待したい（加藤2016:4 なお傍点は筆者による）。

「他国を旅する・・・発見」という加藤一流のメタファは、「子どもらしさ」に対する様々なアプローチの方法や内容をカバーしうる可能性について言及したものである。それは本学会設立の理念としてこれまで繰り返し論じられてきた分野越境と相互交流を志向する学際研究と大きく重なる。

筆者は、全4号にわたる特集号『『子どもらしさ』へのアプローチ』を総括すべく、あらためて掲載の16論文を通読した。多様な領域を専攻する研究者が軒並み高水準の論文を寄稿し、本学会の子ども研究の水準を内外に示すとともに、筆者自身も学ぶところが大変多かった。

「子どもらしさ」の過去・現在・未来
 特集号『子どもらしさ』へのアプローチの総括にあたって

〔表-1〕特集号『子どもらしさ』へのアプローチの掲載論文一覧（22号～25号）

号数	No.	執筆者	論文のタイトル（一部サブタイトルは削除した）
22号	①	田中理絵	子ども社会とは何かーギャング・エイジの仲間集団研究ー
	②	池田曜子	再生産される「子どもらしさ」ー好ましい子どもをめぐる語りからー
	③	師岡章	保育と子どもらしさ
	④	鶴野祐介	岩田慶治の見た「子どもの宇宙」ー教育人類学からの「子ども性」の探究ー
	⑤	加藤理	生成の源としての子どもの内的宇宙と「子どもらしさ」についての考察
23号	⑥	麻生武	「子ども」という鏡 ー特集「子どもらしさ」の五論文を読んでー
	⑦	高橋均	ペアレントクラシー化と「子ども社会」の現在
	⑧	南出和余	グローバルとローカルの狭間で錯綜する「子ども」のイメージと実態
24号 「多様な子ども」	⑨	元森絵里子	モダニティと複数形の「子ども」
	⑩	針塚瑞樹	インドの初等教育普及過程にみる「子ども」の複数性
	⑪	渋谷真樹	「文化的に多様な子ども」から「国際的な視野をもつ人間」へ
	⑫	伊藤秀樹	”ほめる・認める”生徒指導の陥穽
	⑬	鶴田真紀	「発達障害のある子ども」における「子どもらしさ」の語られ方
25号 「後期近代における『子ども』を問い直す」	⑭	山田富秋	ケアとシチズンシップの観点から「子ども」を問い直す
	⑮	石黒万里子	幼児教育における近代性と「子どもらしさ」ーリテラシー（読み書き）と評価をめぐる試論
	⑯	浜島幸司	大学生は「子ども」か？ー子ども社会研究における対象・手法・目的ー
総括	⑰	小針誠	「子どもらしさ」の過去・現在・未来

〔註〕以下、本稿で上記の論文を引用する場合、たとえば小針⑰と略記して示す。

その一方で、22号掲載論文に対する麻生⑥、24号掲載論文に対する元森⑨、25号掲載論文に対する山田⑭において、各号それぞれの「子どもらしさ」に対する視点と掲載論文のエッセンスは必要十分に紹介し尽くされている感もなくはない。それゆえに、あらかじめ言い訳がましい断りを入れておくと、本稿は、特集号掲載論文に屋上屋を架して、筆者の雑感を述べる以上の内容にはならないかもしれない。

それでもなお、若干の違和感を告白すれば、「子どもらしさ」とはそもそも何者なのか、その言葉を用いて何を語ろうとしているのかという問いに対する答えが（個別論文はともかく）全体を通じて不明であったということだろうか。

しかし、それを違和感としてただ表明するよりもむしろ、だからこそ本稿の総括に当たって、検討すべき課題としたほうが建設的であろう。つまり、特集号として掲載された 16 論文が「子どもらしさ」をどのように定義または説明したのかを見直し、総覧しようとする本稿の研究上の意義が本学会全体で共有できれば幸いである。

加えて、私たちの日常の生活や社会のなかで語られる「子どもらしさ」を歴史的に分析し、そのイデオロギーや規範性を浮き彫りにすることで、それが長らく子ども研究や子ども言説を拘束してきた問題点を中心に検討していきたい。

2. 特集号掲載論文は「子どもらしさ」をどのように捉えたか

特集号として掲載された 16 論文がそれぞれ「子どもらしさ」をどのように捕捉したのだろうか。各論文の定義や説明を順次振り返ってみよう。

22 号では、子ども社会としての仲間集団に「子どもらしさ」を求める田中①、「好ましい、またはこのようにあってほしいと期待される、学齢期前の幼児期から青年期中期にいたるまでの規範の一つ」と定義する池田②、「大人が子どもを見て、その性質や状態を表したもの」と述べる師岡③、子どもの「内なる宇宙」としての自然観や世界観、人間観や死生観を岩田慶治の議論から捉える鶴野④、加藤⑤は「子どもらしさ」を「大人が子どもという存在に対して認識したことを示す概念的な内容を示す語」として「子ども観」と同義であるとしている。

22 号の各論文は、特集号第一弾ということもあり、何よりもキーワードである「子どもらしさ」をどのように捉えるかに関心が集中していたように見える。

つづく 23 号の麻生⑥は、22 号掲載の 5 論文より、「実在」「アイデア」「関係性」の三層の子ども認識の軸、内在としての「見えない子ども」と外在としての「見える子ども」という研究対象の軸、構築（制度の改革）か脱構築（制度の相対化）という研究の志向性の軸という三次元で整理した。高橋⑦は、濃密かつ計画的な中産階級の子育てや教育戦略に、体制や義務に縛られずに自律した「子

どもらしさ」(childlike)の社会的な危機を、対する南出⑧は先進国発信のグローバルに共有される「子どもらしさ」がローカル(バングラデシュ)な文脈で生じる文化的な葛藤を素描している。

24号では、「多様な子ども」という副題を掲げ、5論文が掲載された。元森⑨は、既存の子ども研究を、一般化・標準化された、理想や規範としての子どもを前提としてなされてきたと批判したうえで、多様な／複数性の子ども(childhoods)に対するアプローチを提起する。それをうけて、針塚⑩は、インドの初等教育の普及過程で、就学が困難な子どもに対する多様な子どもカテゴリーが使用されてきた過程や歴史を論じる。渋谷⑪は、グローバル化の進む現代社会における子どもの多様性を、国際バカロレア校の実践から考察し、伊藤⑫は、生徒指導において展開される生徒の多様性の尊重と、指導基準の統一化のダブルバインドとその陥穽を描く。鶴田⑬は、正常性や健全性を秘めた「子どもらしさ」(理想の／普通の子ども)を基準に、そこから逸脱したカテゴリーとして、発達障害が特徴付けられることを明らかにした。

本25号は、「後期近代の『子ども』を問い直す」というサブタイトルのもと、3論文が掲載された。山田⑭は、「自律した個人」の社会化を前提とした自由主義社会理論を問い直し、過去から未来、世代と世代をつなぐケアの責任や社会的コモンズの継承を通じて、依存とケアを必要とする存在として子どもを位置づけることで、市民的互酬性に向けた社会理論とともに、後期近代における「弱い個人」の排除に抗う形でシチズンシップ教育を提起している。石黒⑮は、これまでの日本の幼児教育における本質主義的「子どもらしさ」や英国における幼児教育の実践との対比を通じて、2017年3月に告示された幼稚園教育要領から、道具主義的なリテラシー(読み書き)に対する関心の高まりや幼児理解にもとづく評価の実施など、昨今の幼児教育政策を巡る問題点を明らかにしている。他方、浜島⑯は、大学生が子ども研究の対象になりうるかという問いを設定し、子ども／大人の境界線の揺らぎのなかで、現在の「大学生」の存在を読み取りつつ、経済・社会制度や大学教育の諸矛盾を明らかにしている。

再び山田⑭によれば、石黒、浜島の両論文は、コミュニケーション力や非認知的能力といった後期近代型の資質・能力とその育成システム(PDCAサイクルやアクティブ・ラーニングなど)を問題にしている点で、関心を共有して

いるという。すなわち、昨今の幼児教育から高等教育に至る一連の改革は、新自由主義経済に合致した「強い個人」を前提とした能力の向上にしかかなり得ないと同時に、国家主導の保守主義的な改革が進めば進むほど、各教育・保育機関やそこに携わる個人の裁量や自律性は減縮するという。

3. 社会的事実としての「子どもらしさ」

以上、各論文の「子どもらしさ」をめぐる議論をかいつまんで紹介してきた。

16 論文の「子どもらしさ」へのアプローチを見ていくと、「子どもらしさ」というキーワードから、テーマ設定の広がりとともに、多様な子どもが実在、アイデアまたは関係性のなかで描写されている。

また、各論文の「子どもらしさ」の定義や説明に注目すると、池田②のように、おとなが子どもに対して抱く「あるべき」規範や「好ましい」理想像を中心に定義する場合もあれば、子ども観などと同一に扱って論じる加藤⑤など、その定義や説明はそれぞれの研究対象や問題関心によって様々ではあるものの、子どもに対する特定の表象や見方を意図している点では、コインの表裏の関係のように見える。さらには、鶴田⑬のように、発達障害児との対比で、健常児の「子どもらしさ」が論じられるほかにも、幼児期の子どもから大学生（浜島⑩）まで幅広い年齢層が「子ども（らしさ）」研究の射程に入りうることも確認できた。

このように「子どもらしさ」は多様であり、ゆえに統一的な定義や説明を求めようとする、困難を極めることになる。そもそも「子どもらしさ」とは、学術研究ではあまり用いられることのない、どちらかといえば日常のなかで何気なく口をついて出てしまう通俗的な言葉である。

もっとも個人的な印象を述べれば、どこか胡散臭く聞こえてしまう言葉でもある。それは「子どもらしさ」の価値判断がそれぞれの個人の恣意に大きく委ねられ、「子どもらしさ」に対する唯一絶対の価値基準を求めることが困難だからであろう。困難であることに加えて、私たちの目の前に映る様々な子どもたちを見ていて、いったい「子どもらしさ」とはいったい何を意味するのか、判然としない部分は小さくない。それにも関わらず、「子どもらしさ」や「子どもらしからぬ」を線引きする根拠については、ほとんど自覚されることはな

い。

その「子どもらしさ」は、個人の価値意識にとどまらず、規範的な集合意識として機能することもある。だからこそ、他方で、南出⑧や針塚⑩が明らかにしているように、社会や文化間での「子どもらしさ」の捉え方や意味づけが合意されるとは限らず、その間で葛藤が生じることもある。つまり、「子どもらしさ」こそ、個人の主観に内在する思考・行動・感覚の様式であると同時に、個人の意識に命令的・強制的に作用する社会的事実にはかならない（デュルケム 1895=1978 訳）。

私たちは、子どもに対して、いかなる「らしさ」をイメージし、社会的事実として構築・成立させてきたのだろうか。

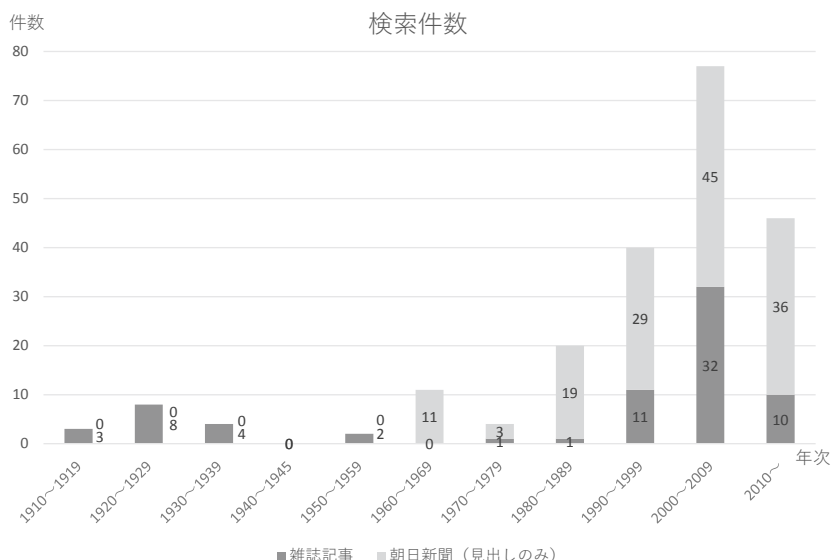
4. 近代の童心主義的「子どもらしさ」の誕生

私たちが子どもを語り論じる際の「子どもらしさ」とはそもそも何者であり、「子どもらしさ」を通じて何を考え、語ろうとしてきたのだろうか。「子どもらしさ」に意図された意味内容を明らかにするために、過去の雑誌記事や新聞記事における定義や説明に注目し、歴史的に考察しよう。

国立国会図書館デジタルコレクション (<http://www.ndl.go.jp/>) における雑誌記事（全文検索）ならびに朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」による記事検索（見出し検索のみ）によって、「子供（子ども）らしさ／らしい／らしき」をキーワードとする検索結果をもとに考察してみよう（断りのない限り、以下は「子どもらしさ」で統一する）。

管見の限り、雑誌記事における「子どもらしさ」の初出は1910（明治43）年で、1945年までの検索件数はわずか12件に過ぎなかった。その後、すなわち戦後の長期間に、「子ども（子供）らしさ」はそれほど多くを確認できなかったものの、1980年代になると新聞記事を中心に増加し、1990年代には新聞、雑誌そろって急増し、2000年代にピークを迎える。歴史的に見ていくと、「子どもらしさ」は当初はマイナーな言葉であったものの、1980・90年代以降にポピュラーな言葉へと変容したと言えるだろう。

〔図-1〕 「子どもらしさ」の雑誌記事／朝日新聞の記事の



近代に萌芽した「子どもらしさ」の特徴は以下の通りである。

第一に、子ども自身の存在を高く評価し、純真無垢ともいうべき子どもやその状態を指して「子どもらしさ」として高く評価する本質主義的な童心主義と大きく重なる。

「子どもらしい」子どもとして、「天真爛漫な愛らしい子」(秦政治郎 1910『家庭訓育百話 性癖矯正』金港堂)や、「雑駁である、系統のない、秩序のない、整理せられていない思想」(上島信三郎 1921『綴り方教授の経験と感想』中文館)の子どもと説明され、人物写真の撮影法に関する指南書でも「庭で無邪気に遊戯してゐる様子だとか、お菓子を食べて乍ら笑つてゐる表情」を「子供らしい」と述べている(勝田康雄 1926『人物写真のうつし方』アルス)。共通して、童心主義的な「子どもらしさ」こそが、本来の子どもの自然であり、理想であるという。

第二に、自然主義に根ざす童心主義的な「子どもらしさ」は、「小賢しい」や「大人びた」などとの対比で、「子ども（子供）らしくない」の同義反復的な対義語であった。それは童心主義的な「子どもらしさ」と対比されて、「子どもらしからぬ」表象として、おとな（親や教師など）による型にはめこむ教育のあり方、記憶力を頼りにした詰め込み教育や入学試験の悪弊、おとなの意図を忖度して行動する子どもが批判的に論じられた。それは「子どもらしさ」として「純真なこと、すなほなこと、無邪気なこと、大人びてゐないこと、生意気でないこと」（万福直清 1928 『伸ばす綴方教育・直面的叙写主義 尋4 教師用』東京出版社 傍点は筆者による）などにも見られる。

ただし、「子どもらしさ」は、論者各自の主観的な了解可能な子どもの表出であり、その言説の多くに根拠を伴っているわけではない。つまり、その特徴は、論者それぞれの子どもに関する立場や感情・思想を正当化するための言葉だとも言える。

第三に、おとなの意識やイメージとしての「子どもらしさ」と、子どもの実態との間に相違や違和が自覚されたときに、「子どもらしさ」が発せられる傾向にある。すなわち、「子どもらしい」子どもとは、麻生⑥の言うアイデアとしての子どもであり、おとなが一方的に描く幻想の子どもに過ぎないとも言える。したがって、その幻想や理想の子ども像が覆され、歪められていると判断されたときに、その原因とともに、童心主義的な「子どもらしさ」がおとな—子どもの関係のなかで語られ、適切な教育や保護のあり方もあわせて提案される傾向にある。

そもそも「子どもらしさ」が雑誌記事において見られるようになった1900年から1910年代前後には、近代日本の社会変容とともに、子どもをめぐるまなざしも大きく変わった。一部の社会階層（都市新中間層）における少産主義による人口動態の変化や「教育家族」の成立（沢山1990）に伴う童心主義の萌芽にくわえて、近代ヨーロッパにおいて発表された海外の文学作品の翻訳を通じて、天真爛漫さや清らかさに代表される「美しい子ども」に「子どもらしさ」を見ようとする価値の移入もあった（高橋2015:第五章）。

その子どもへのまなざしは、おとなの子どもに対する「可愛がり」と「激昂」を同時に覚醒した（アリエス1980訳）。可愛がりの心性が童心主義より発露し

たものであるとすれば、激昂は厳格主義（広田 1999）や規律主義によるものと対比されて、両者は矛盾する教育・しつけ意識として捉えられてきた。

しかし、童心主義と規律主義は、おとなが子どもを統制可能な対象として見ていた点では、同じ地平にあったと見ることもできる。

つまり、先に見た「子どもらしさ」言説は、子どもに対するおとなの一方的な見方や理想像であると同時に、現実の目の前の子どもたちもまた、おとなの適切な教育や保護を通じて、おとなの理想とする「子どもらしい」子どもに近づけられる可能性を仄めかしたものであった。だからこそ、適切な教育や保護を行う場として、近代学校教育の存在意義が認められるようになった。そして、おとなは、教師や親としての権威や権力を盾に、子どもとの間でヒエラルキーを構築し、教育や保護を通じて、「子どもらしい」子どもの社会化に成功した（と長らく思い込んでいたのかもしれない）。

その「子どもらしさ」誕生の時代背景には、20 世紀を前後して、標準化・規格化と多様化という、相反する子どもをめぐる状況や現象が同時代的に発生したことに注目すべきであろう。

まず、標準化・規格化について言うと、子どもたちの多くが学校に通って教育を受け、学ぶという形式が一般的になり、就学率が上昇した。また、「児童研究」が着手され、数量的分析にもとづいて「平均」が示され、それが子どもの発達や能力の基準として規範化された。その基準に適合していた都市新中間層の子どもこそが「子どもらしい子ども」と見なされるようになったものの、言うまでもなく、それは特定の地域や一部の社会階層の子どもに過ぎなかった。

同時期の日本社会に広く目を向けると、農山村や都市部の貧民窟（いわゆるスラム地区）には、貧困や病、親の無理解などを理由に学校に通えない子どもや発達基準から「逸脱」したとみなされた障がい児など、いわゆる「子どもらしさ」の基準から乖離した子どもが多数かつ多様に存在していた（小針 2007）。

その童心主義的「子どもらしさ」の基準に合わない子どもたちは、社会のなかで周縁化され、「子どもらしさ」からは排除されていくか、または「子どもらしさ」に馴致させるべく、教育や保護が強化された。したがって、「子ども」として認められるか、零れ落ちるか、ここから近代の「子どもらしさ」は両者を選別するフィルターとして機能していた可能性を指摘できる。

以上で見てきた近代の童心主義的「子どもらしさ」は、後の1980年代以降の子ども論においても、強力な枠組みであり続けたのではないだろうか。次節では、その検証のために、1980年代以降の「子どもらしさ」や代表的な子ども論に注目し、論じてみよう。

5. 現代の「子どもらしさ」とモラルパニック

新聞・雑誌記事における「子どもらしさ」言説は、先掲〔図-1〕の通り、1980年代以降に急増する。背景には、前節で見た近代の童心主義的な「子どもらしさ」の枠組みでは、子どもに関わる了解不能な問題や現象が発生、報道された。

1980年代には、校内暴力や家庭内暴力などのような、教師や親の権威や権力が無効化したとされる現象が発生した。その同時期またはそれ以降には、陰湿ないじめ問題とそれを苦にして自死する子ども、受験競争や落ちこぼれ、学校に行かない登校拒否や不登校の子ども、凶悪犯罪に手を染めるなどの問題が「子ども問題」としてマスメディアを通じてさかんに報じられるようになった。

1990年代に入っても、子ども問題をめぐる見方・枠組みは大きく変わることはなかったが、マスメディアの報道はさらに熱を帯びた。『子どもが変だ』(別冊宝島129 JICC 出版、1991年刊)、『子どもがあぶない』『子どもがわからない』(いずれも朝日新聞社、1997年・98年刊)などの書籍が相次いで刊行され、従来の「子どもらしさ」イメージから逸脱した子どもに対して、「子どもらしくない」というレッテルが貼られた(春日2000)。

そのみならず、おとなは、「子どもらしくない」とイメージされた子どもを、見慣れぬ他者であり、理解不能かつ統制不能な「わからない」対象とみなした(本田1982)。それは、往時の教育社会学の研究においても、不可思議な別世界を意味する「異界」を生きる存在として、少年少女が捉えられたことにも表れている(門脇・宮台編1995)。

異質な他者として、異界を生きる子どもたちは、「天真爛漫」「すなほである」という近代的な童心主義子ども観を基準にすると、明らかに逸脱した存在、それどころか理解不能やわからない存在として捉えられた。それは、既存の「子

どもらしさ」のイメージや基準では理解できないことに対するおとなの苛立ちが社会全体のモラルパニックを招くことになった。

「異質な他者」である子どもに対して、研究者もまた、様々な調査研究を通じて、問題とされる現象の原因とともに、その実態の解明を行ってきた。

ある論者は、問題の原因を、学歴社会や入学競争または詰め込み教育のストレスに、別の研究者は人口動態、食生活、新しく登場したメディアや娯楽・遊びの変容に、保守的な政治家たちは戦後民主主義教育にそれぞれ求めた（本田 1999, 門脇・宮台編前掲など）。しかし、それらは「わからない子ども」に対する必要十分な回答にはなりえなかった。それというのも、両者は問題と原因が対になっている因果関係というよりも、同時偶発的に発生した相関関係に過ぎないとも言えるからである。

また、研究者を含めた子ども論者も、自らの出自（出身地域・階層）や教育体験・養育歴に根ざした背後仮説や過去に対するノスタルジック（小谷 2003）を伴いながら、童心主義的な「子どもらしさ」や「子ども期」を自明視したまま、子どもを論じる傾向にあったのではないだろうか。彼ら・彼女たちは、規範や理想としての「子どもらしさ」に一致しない事態（ズレ）を見出したときに、「子どもらしくない」と認識し、子ども問題を論じていたように映る。

以上のように、1980年代以降には、各種子ども調査も含めて、子どもを客観的・中立的に捉え、論じようとするほど、特定の「子どもらしさ」の基準が強化され、「子どもらしさ」の範疇外の子どもを異質な存在とすることで、子ども問題が認識され、その改善や解決が求められてきた。そのひとつとして、臨時教育審議会（1984～87年）以降、新自由主義と新保守主義（規律主義）による教育改革が進められていくことになった。しかし、伊藤^⑫が明らかにしたように、児童・生徒の多様化が進む中、学校現場で指導基準を統一し、指導を強化しても、子ども問題には有効ではないのである。

6. 結論

本稿は、特集号『「子どもらしさ」へのアプローチ』の総括論文として、掲載論文の定義や説明に注目した。そのうえで、「子どもらしさ」の歴史性を考

察し、「子どもらしさ」の起源が近代の童心主義にあったことを明らかにした。

さらに時が経過して、現代日本では、「子どもらしさ」の意味内容は大きく拡散し、その都度、子ども（らしさ）を語る者の子どもに対する心象（子ども観）や実践の立ち位置を正当化する言説として作用してきた。近代以降の私たち（研究者も含むおとな）にとって、子どもを語る上でイデオロギーとして作用したのがほかならぬ「子どもらしさ」であったとも言えよう⁽³⁾。

近代社会は、子どもに「らしさ」を求め、やがてはおとなになることを期待して、おとなが相応しい適切な環境を通じて「子どもらしさ」の普遍化を目的に、学校教育をはじめとする社会の諸制度を構築・整備してきた。

その結果、おとなと子どもの境界が明瞭に区別された。おとなは、子どもに対して、いま・ここで「してあげる主体」（社会化の主体 socializer）であり、やがては「なる対象」とみなされてきた。「子どもらしさ」もまた、子ども固有の言動とそれに対するまなごしの函数（本田 1989）であるとすれば、その媒介の主体はおとなであった。そして、おとなによる子どもの社会化を通じて、当該社会の再生産が可能になると考えられてきた。

ところが、昨今では、近代社会の諸システムは限界に近づき、おとなが子どもに「してあげる」ことも、おとなに「なる」ことのいずれも困難に直面している。

そもそも子どもが出生しなくなっているという人口動態（少子化）に加えて、子どもが誕生しても、格差や貧困などを抱える現代の日本社会では、すべての子どもに「してあげる」ことが困難になっている⁽⁴⁾。

また、「なる対象」としてのおとなも、浜島⁽⁵⁾が明らかにしているように、ライフコースが多様化または複雑化し、子どもからおとなへの一方的な発達・成長または移行が困難になっている。

その困難の背景のひとつには、近代から引き継いできた社会の諸制度の限界や綻びが露見しているにも関わらず、わたしたち（とりわけおとな）が本質主義かつ一元的な「子どもらしさ」規範に束縛されたまま、グローバル化、AIやICTなどのテクノロジー化、格差や不平等をはじめとする社会の変化やそこに住まう子どもの多様化に十分に対応できずにいるからではないだろうか。または、対応しようにも、現実離れした的外れな対策になっているからではな

いだろうか。

その限界や問題に対して、プラウト（2017 訳）や元森^⑨が示した子どもの多様性・複数性（childhoods）に注目する研究の方向性もあるだろう。両者が論じるように、自然／文化という構造主義的人類学に起源する単純な二分法のカテゴリーはもはや有効ではない。

かつて筆者は、日本の子どもの歴史を分析するうえで、時代差、性差、地域差、身分差・社会階層差、発達段階差といった参照軸を設定し、子ども社会のありようを比較し、多様性の考察を提唱したことがある（小針 2007）。それによって、同時代または時代間の多様な子どもの存在を浮き彫りにできると考えたからである。

子どもの多様性の分析には、先掲 5 点以外の比較参照軸もありうるだろうし、性、貧困、障がい、国籍、人種・民族、宗教などのカテゴリーやそれを前提にしてきた既存の子ども研究のあり方も批判的に問われなければならない。たとえば、性については、もはや男性／女性の二分法は失効しているし、それぞれの性指向やアイデンティティも多様化している。さらに、性や人種、宗教などが交叉している場合も少なくない。現象や問題の個別化が進むなか、多様な子どもを分析する際に自明視してきた社会的な見方やカテゴリーとともに、その理論やアプローチの方法も厳しく問われている。

多様な子どもの背後には、多様化する社会や環境が並立、連動していることが少なくない。これからの本学会は、社会のなかで子どもの置かれている現状や問題に対して、多様な学問分野の研究者が分野を超えて共同して実証知を蓄積しつつ、実践科学や政策批判を通じて、社会に広く発信していくことが求められているのではないだろうか。

社会の多様化が進むなかで、これまで自明視されてきた特定の子どもの表象や幻想とも言うべき「子どもらしさ」言説は空虚に響くだけである。わたしたちの社会には、多様な人間が住まい、その存在を相互に承認する社会の構築に向けた研究が期待されている。それは子どもの社会についても同様に当てはまる。

本特集号『「子どもらしさ」へのアプローチ』は、現代社会の子どもや子ども論が抱える課題に真っ向から挑んだ時宜に合った研究テーマであり、多領域

の研究者による多様な「子ども（らしさ）」を提起するなど、優れた成果を達成したと言えるのである。

〔付記〕本研究は、2019年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究課題／領域番号 19K02535 による研究成果の一部である。

註

- (1) 23号では、本特集とは別に「子どもの人権」という特集が生まれ、3論文が掲載されている。
- (2) これまで本誌は、10号「子ども社会研究の可能性」(2004年)、15号「子ども社会研究の課題と展望」(2009年)、20号「特集：日本子ども社会学会20周年記念論文」(2014年)の周年特集号のほかに、17号「葛藤する子どもたち—子どもの感情世界を探る」(2011年)、19号「東日本大震災と子ども社会」(2013年)、21号「子ども中心主義のパラドックス」(2015年)が特集号として刊行された。
- (3) 本稿の限界は、過去（近代）と現在（現代）という2時点のみの「子どもらしさ」言説を考察しただけの雑駁な議論にとどまった点にある。「子どもらしさ」言説は、過去と現在では同一の意味内容であるはずもなく、今後はその変容過程を明らかにする丁寧な作業が求められる。
- (4) 高橋⑦は、積極的に子どものために「してあげる」新中間層家族の教育戦略を、むしろ「子どもらしさ」に反するものと捉えるユニークな視点を提示している。

引用文献

- アリエス, Ph (1980 訳) 『(子供) の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』(杉山光信・杉山恵美子訳) みすず書房。
- デュルケム, E (1978 訳) 『社会学的方法の規準』(宮島喬訳) 岩波文庫。
- 広田照幸 (1999) 『日本人のしつけは衰退したか 教育する家族のゆくえ』講談社現代新書。
- 本田和子 (1982) 『異文化としての子ども』紀伊國屋書店。
- 本田和子 (1989) 『フィクションとしての子ども』新曜社。
- 本田和子 (1999) 『変貌する子ども世界』中公新書。
- 春日清孝 (2000) 『子どもらしさ』の現在『研究所年報』(明治学院大学社会学部付属研究所) 30号 135～146頁。
- 小針誠 (2007) 『教育と子どもの社会史』梓出版社。
- 小谷敏 (2003) 「アリエス・本田和子・八〇年代文化—子ども言説を規定したもの—」小谷編『子ども論を読む』世界思想社 98～119頁。
- ブラウト, A (2017 訳) 『これからの子ども社会学 生物・技術・社会のネットワークとしての「子ども」』(元森絵里子訳) 新曜社。
- 沢山美香子 (1990) 「教育家族の誕生」中内敏夫他『教育—誕生と終焉』藤原書店 108～131頁。
- 高橋修 (2015) 『明治の翻訳ディスクール 坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』ひつじ書房。